



毎日もらえる追放特典で ゆるゆる辺境ライフ! 2

α L P H α L I G H T

水都蓮
Minato Ren



ライト

ブライの追放に
加担した冒険者。
ノーザンライトにも
現れる。

アリシア

聖教騎士団
所属のシスター。
ブライに思いを寄せる。

ユキ

ノーザンライトの
観光協会会長の娘。
東方にルーツを持つ。

レオナ

才能豊かな魔導技術者。
辺境の村に
隠れ住んでいる。

ラピス

エルフの血を引く少女。
村の防衛で活躍する。

エスティアーナ

通称エスト。二千年前から
封印されていたが、ブライと
運命的な出会いを果たした。

ブライ

ギルドを追われたお人好し冒険者。
謎のスキル【ログインボーナス】で
人生が一変する。

Main Characters
登場人物紹介

第一章

【ログインボーナス】と呼ばれる、とあるユニークスキルが存在する。

俺——ブライ・ユースティアは、エルセリア王国の王都スノウイングにある冒険者ギルド【月夜の猫】に所属していたが、思わぬことでギルド長の不興^{ふきよう}を買^かい、追放されてしま^う。仲間であるパーティの面々にも冷たくあしらわれ、行く当てもなくなつた俺に目覚^{めざ}めたスキル——

それが【ログインボーナス】だ。

毎日一つ、何かしらの「特典」が与えられるスキルで、城の権利証を始めとして、名馬に馬車、数々の魔導具^{まどうぐ}を授^{さづ}かるようになった。

そして、頭の中に響^{ひび}く謎^{なぞ}の声に導かれ、俺が辿^{たど}り着いたのは、王国北端^{ほくたん}にあるエイレーンという村だ。

村の人達は度重なる魔族^{まじ}の襲来^{しゅうらい}に疲弊^{ひへい}し、苦しんでいたが、それにもかかわらず、彼らは居場所を失^なくした自分を迎^{むか}え入れてくれた。何かしら恩返^{おんぷ}しがしたい。そう思った俺は

村を復興させながら、村を襲う魔族と戦い、その過程で新たな仲間を得た。

二千年近くも氷に封印されていた魔道士エスト、エルフと人の間に生まれた弓使いラピス、逃亡生活中の魔導技術者レオナ。みな訳ありだが、頼りになる存在だ。

そして、魔人と呼ばれる存在との激闘の末、どうにか魔族達の大侵入を防ぐべき結果が解かれており、そのせいで村は魔族に襲われていたというのだ。

エドモンドは俺の魔人討伐の実績を見込んで、結界の再構築が完了するまで、北方の防衛に力を貸してほしいと依頼してきた。俺は、エイレーンの復興をしながらであれば、と条件を付けて、その依頼を受けたのだった。

【ログインボーナス】の導きのままに動いてみたが、思いの外大きな話になったものだ。「ログイン」という言葉の意味を始め、謎だらけのスキルだが、一つはつきりしているのは、俺はこの北国暮らしも悪くないと——いや、それどころか気に入りはまっているということだ。

*

エド——エドモンドの愛称だ——から使命を授かり、俺達は新たな故郷とも言えるエイレーンに戻っていた。例の魔人ガルドウスを倒したお陰か、連日のように押し寄せてい

た魔族の襲撃も鳴りを潜め、穏やかな日常を過ごしている。

「麦麦麦麦麦麦……麦はっかで食材がたりーないー!!」

いつも通り、レオナの工房で朝食をとっていると、堰を切ったように突然エストが大声で叫び始めた。

そう。俺達は、村の抱える深刻な問題に直面していた。

——食料危機だ。

「とうとう村の蓄えが尽きたそうだな。セインさんも困ってた」

「うう……毎日パンだけじゃ飽きるよお……」

エストはだらりとテーブルにうつ伏せになると、バンバンと机を叩き始めた。無理もない。今は食料不足で、連日パンをかじっている状態だ。

「行儀が悪いですよ、エスト」

そんなエストを見兼ねて、ラピスが注意する。

「ラピスちゃんはパンばかりじゃ飽きないの?」

「んでもない。エストが作ってくれたパンは美味しいですから。飽きるはずありません」

「ラピスちゃん……」

その言葉に感極まったエストが、ラピスの胸に飛び込んだ。

確かに、エストの作る料理はうまい。今食べているパンも、オーソドックスなものではあるが、市販のものとは段違いだ。外身はさつくり、中身はもっちり、絶妙なバランスの食感が舌を撫でていく。口いっぱいに広がる香ばしい風味は、小麦本来の味をしつかりと引き立たせている。焼き加減と、生地に混ぜるスパイスにこだわった結果だそうだ。

それほどの逸品なので、俺も別に飽きが来ているわけではない。

「食料か……」

しかし、これからますます寒さが増す時期だというのに、村の備蓄が底を突いたのは深刻な問題だ。

「しばらくは【ログインボーナス】で凌ぐしかないが、それだけじゃ意味がないよな」
冬の初めだというのに、このようなことになってしまったのも、魔族の襲来によるものだ。

村に強固な防壁を築いたことで、魔族の襲撃に怯える必要はなくなった。しかし、いくら守りを固めても、先の襲撃で失った家畜や畑は戻ってこない。【ログインボーナス】でこの冬を乗り越えたとしても、村の農業、畜産が停止している現状はどうにかしなければならぬ。

「農地の再生……か。まだまだ課題は多いな」

この寒さの中でも安定して栽培出来る野菜などがあれば、何とかなるのだが……

「なんか、閃いたかも!!」

その時、エストの頭になにか考えがよぎったようだ。

「なんかって、なんだ？」

「付与術だよ、付与術。種に《防寒》のルーンを刻んだりしたらいけるんじゃない？」

「ふむ……」

俺は黙り込んで、エストの提案を検討してみる。

「あれ？ 私、変なこと言った？」

沈黙を否定と捉えたのか、エストが心配そうに顔を覗き込んできた。

「いや。試してみる価値はあるかもしれない」

ルーンというのは、動物や魔獣、植物などが持つスキルのようなものだ。

《防寒》《毒抵抗》《軽量化》など様々な種類があり、これらは付与術を利用することで、アイテムに付与することが出来るのだ。

「もしかして、エストは付与術が使えるのですか？」

エストの発言にラビスが驚く。

「うん。むしろ得意な方かな」

「そりゃ凄い。付与術士も魔導技術者並みに珍しいからな」

こんな身近に付与術と魔導具に詳しい人が両方いるとは、この村も人材が豊かなものだ。

「ですが、ルーンの確保はどうするのでしょうか？」

ラピスがふと疑問を口にする、レオナがいつもと同じ調子で口を挟む。

「畑に蒔く量を考えたら、とんでもない量のルーンを確保しないといけないわね」

「あー……」

エストが呆けた表情を浮かべた。

「どうやらそこまでは考えていなかったようだ。」

「村の 사람들이 冬を越すのに必要な量を栽培するだけでも、少なくとも数千は必要になるだろうな」

「それだけのルーンを確保するために討伐したら、この辺りの魔獣が絶滅しちゃうわね……」

レオナの言う通りだ。

魔獣などからルーンを抽出するには、とても高度な技術と専用の容器が必要になる。抽出自体にも時間がかかるので、必要量を集めるのはとても現実的ではないのだ。

「実際、ルーンの抽出って面倒なんだよね。集中力も要るし、弱い魔獣や植物から抽出しようとする、だいたい失敗しちゃうし、なるべく大型の魔獣を狙った方がいいかな」

エストがルーンについて軽く説明する。魔獣や植物は体内に蓄えた魔力を練り上げてルーンを生成するようだ。強力な魔獣は、体内の魔力量も多いので、それだけ上質なルー

ンが手に入るが、弱い魔獣などはそうはいかない。なので、基本的にルーン集めは強力な魔獣を討伐して行うものらしい。

ルーンを使うのはいい案だと思ったが、そんな根気のいる作業を繰り返して必要数を集めるなど、あまり現実的ではない。

——「ううやう、私の田舎のようだよ。」

その時、脳内に無機質な音声が響いた。俺のスキル【ログインボーナス】が発する音声だ。

「まだ呼んでないぞ」

なんとも主張の激しいスキルだ。

——それは悪口でしょうか？

いやいや違いますよ。心の声を読まないでくれ。

「今の声……【ログインボーナス】のですか？」

三人には【ログインボーナス】の機能の一部を使えるようにしているから、今の声はみんなにも聞こえている。

——冗談はさておき、ルーン、もしくはルーンを付与したアイテムの複製は可能です。

「どれくらいのコストがかかるんだ？」

——一般的な植物の種に5マナ、Eランク相当の《防寒》のルーンには10マナ必要とな

ります。

ということとは、『防寒』のルーン付きの種だと15マナか。魔導具に比べると随分とコストが低い。

ちなみに、マナというのは魔法を発動させるエネルギーのことで、現在は城や武器といった物ではなく、この土地から得られるマナを毎日の特典として貰っている。そのマナを貨幣代わりにすることで、希望の品に交換できるのだ。

「ちなみに今の一日あたりのマナ抽出量は？」

—5000pt。

一日あたり三百個用意してもおつりが来る計算か。

「よし、一つルーンを見付けさえすれば、種と一緒に複製するのは楽勝だ。早速ルーン探しに行こう」

「というわけで、我々探検隊は、雪の吹き荒ぶ秘境へとやって来ていたのだ」

エストよ、そのナレーションはなんだ。

俺達は、村から少し離れた場所にある遺跡を訪れていた。

「ここってダンジョンってやつだよな？」

ダンジョンというのは、魔獣や財宝が潜む地下迷宮のことである。大陸に無数に存在し、

一定の時間が経つと魔獣と財宝が復活し、中の構造そのものが変化するという不思議な仕組みをしている。

そのため、多くの冒険者や騎士達が経験値稼ぎや、アイテム集めをしによく潜っている。俺も、『月夜の猫』で戦力外通告を受けた時は、ダンジョンに潜って必死に経験値稼ぎをしたものだ。

「もしかして、エストの時代にもあったのか？」

「うん。研究に使う素材を集めたり、危険な実験に使ったりしてたかな」

「ということ、エストの時代に作られたものなのか？」

「ううん、私達がいた頃よりも前らしいよ。使われてる技術が全然違うんだって」

「確かに、エストが封印されていた遺跡とはだいぶ意匠が異なるな。一体誰が、こんなものを作り上げたんだ」

エストが囚われていた遺跡は、つるつるとした陶器のような質感の材質で出来た空間であった。先史文明時代の遺跡は、そうした材質で作られた小綺麗な外観をしているものが多い。主だ。

しかし、ダンジョンにそういった共通点は見られない。遺跡、洞窟、森林、火山など、中の様子は様々で統一感がないのだ。おまけに時間経過と共に魔獣や財宝が生成され、内部構造を自由に変えるなど、あまりに非常識な造りをしている。

「まあ、確かに不思議な場所だけど、色々と便利だからそれでオッケイじゃない？」
あれこれと考え込む俺に対して、エストは随分と脳天気というか前向きであった。

確かに、俺の頭で考えても分からないことなので、そういうのは気に留めない方が建設的だ。

ここは彼女のお気楽さを見習うこととしよう。

「エストの言う通りだな。俺達の目的は考古学じゃなくて、ルーン採集だ。今回はエストの協力が必要不可欠だからな。よろしく頼むよ」

「うん」

そうして俺達は、ダンジョンの中へと足を踏み入れていく。

今回挑むダンジョンは、氷窟とも言うべき空間であった。

細く長く伸びる氷柱の数々、波のようにうねった模様を描く岩壁、そして地面いっぱい

に張られた氷、寒冷地にびつたりなダンジョンである。

「うへえ……かなり寒いねここ」

エストは洞窟の奥から流れる冷気に、思わず身を震わせる。

「氷の魔術が得意なのに寒さが苦手なのか？」

「関係ないよ!! ブライだつて雷に打たれたら痛いでしょ!!」

「それは……」

エストの返答に、俺は言葉を濁してしまふ。

「え? 平気なの……?」

「いや、そうじゃない……ただ昔、雷の魔法を習得するなら、実際に打たれるのが一番
だつて言われて雷撃を浴びせかけられたことを思い出して……」

嫌な記憶が蘇り、汗がじわりとにじみ出る。

「え……なにそれ……」

エストがドン引きしていた。

「身寄りのない俺を引き取ってくれた師匠とも呼べる人なんだけど、とにかく厳しい人
な。崖から突き落とされたかと思つたら、暗い森で一ヶ月サバイバルをさせられたりとか、
生きるために色々仕込まれたんだよ」

「うわあ……スパルタだね……」

「生きる術を叩き込んでくれたことには感謝してるが、あんな目に遭うのは二度とこめ
んだ……」

「今はその人何してるの?」

「分からん。自由な人だからな。ある日、独り立ちの時だろとか言っていなくなった
んだ」

「へえ、変な師匠さんだね」

「まあ、あの人のことはいいだろう。いずれ紹介する機会があればいいけど、会えるかどうかも分からないしな」

それよりもまずはルーン集めだ。根気のいる作業なので長期戦になるだろう。

「確か、強力な魔獣からじゃないとほとんど採集出来ないんだよね？」

「うん。弱い魔獣だとルーンの成熟が不十分で、すぐに壊れるからね」

エストと雑談しながら洞窟を進んでいると、一面に氷が張ったエリアへと出た。

「これじゃ足が滑って戦いづらいな。エスト、魔術でなんとか出来たりしないか？」

「うーん……無理!!」

いい返事だ。出来ないことははっきり出来ないと言う方が好ましい。

「というか、ブライの『ログインボーナス』はどうなの？」

「確かに。こういう時こそアレの出番だな」

俺は頭の中で念じて『ログインボーナス』を発動させる。

——『**開発**』を実行いたします。マナ消費量を選択してください。

確か、『**開発**』に使えるマナの上限は1000だったはずだ。

出てくる魔導具は大抵D、Eランク。B以上は疎か、Cランクのアイテムが出ることも稀だ。だが、氷上を歩くだけならそれほど高ランクのアイテムでなくても大丈夫だろう。

そういうわけで、上限までマナを消費することとした。

——ダンジョン内の発動なので、3000マナまでご使用いただけますが、いかがしますか？

ん？ ダンジョンの中だと仕様が変わるのか。

——ダンジョン内の魔力を活用し、通常よりも高機能な『**開発**』がご利用いただけます。

「へえ、すごいね。でも、ダンジョンとブライのスキルに何の関係があるのかな」

「まあ、このスキルが謎だらけなのはいつものことだからな。とりあえず、試してみよう」

俺は3000マナを消費して『**開発**』を実行する。

すると、目の前に蒼白い光が浮かび上がり、靴のような形に変化していった。

「これは……」

【**鑑定眼**】を発動させてアイテムを調べるが、これといって情報は得られない。

どうやらこれもBランク以上のアイテムのようだ。

「ちょうどブライが履けそうなサイズだね」

「早速、試しに履いてみるか」

俺はブーツを足下に装備すると、辺りを歩いてみる。

「おお、おお、なんだこれ……凄い……凄いぞエスト!!」

「ちゃんと説明してくれないと分からないよ。どんな感じなの？」

「なんだろうな。どんなにでこぼこした地面でも、真つ平らな道を歩いているような感覚になるんだ。地面から少し浮いてるような心地だ。多分これなら氷の上を歩いても大丈夫だろうな」

そのまま氷の上を歩いてみる。

まるで靴裏に滑り止めが貼られているかのように、俺の足はきゅつと氷の上で止まった。

「それっぽく説明するなら『地形効果を無効化する』って感じか？　これがあれば洞窟探索もなんとかなるだろうな」

「それなら私はどうすれば……？」

「複製」しておこう。コストは掛かるが、魔人を追い払った時に大量のmanaを手に入れたから、大丈夫だろう」

——このアイテムを「複製」する場合、manaを12000消費しますがよろしいでしょうか？

12000消費ってことは、もしかしてこれ、Aランクのアイテムなのか？

——そうなります。

手持ちのmanaは約50000あるので払えなくはないが、やはり「複製」のコストは重いな。とはいえ、ここで消費しても問題はない。俺はエストの分を用意すると、改めてダ

ンジョンの奥へと歩いていく。

「あははは、すごい!!　見て見て全然滑ってない」

つるつるとした氷の上で、エストがぐるぐると舞い踊っていた。俺が生成したブーツの
お陰で、彼女は足を滑らせる様子も見せずに、すいすいと洞窟の奥へと進んでいく。

「あまりはしゃぐなよ。魔獣もいるからな」

言ってる側から、コウモリ型の魔獣が数十飛来してきた。全身に冷気を纏っていること
から、氷属性の魔力を持つ種のようなのだ。

「分かってる、分かってる」

一方のエストは、慌てた素振りも見せず、指先に魔力を込めると宙に陣を描いた。そして、周囲に銀色の魔力光をふりまいたかと思うと、コウモリ達を一瞬で凍り付かせてしまった。属性的には相性が悪いはずだが、エストの腕の前では関係ないようだ。

「うーん、かなり加減したけど、一瞬で凍り付いたし氷耐性は高くなさそう」

さて、彼女を連れてきた理由はこれだ。

魔獣からルーンを抽出するには時間と手間が掛かる。なのでエストの魔術で、氷への耐性を持ってないか当たりをつけながら採集しようという方針なのだ。そうして洞窟内の魔獣を狩りながら、俺達は奥へと進んでいく。

しかし、目当てのルーンは手に入らず、ついにはダンジョンの最奥にまでたどり着くのであった。

「全部ハズレだったね……」

「ああ、中型種で氷に強い魔獣はいたけどなあ……」

いざ討伐して、エストが抽出の魔術を掛けると、抽出を終える前にルーンは砕け散ってしまったのだ。やはり大型の魔獣でないと、うまく抽出出来ないようだ。

「後はこの扉の先か」

そこにはずっしりと大きな扉が待ち構えていた。

これはいわゆる「ボス部屋」と呼ばれる空間に繋がる扉で、ボスというのは、並の魔獣とは比較にならないほどに強力な魔獣のことである。

「これでダメならまた入り直しだな」

ボスが撃破されてから一時間後に、ダンジョンは内部が再構成される。なので、今回ダメならまた挑戦することも出来る。出来ればこの一回で済めばいいのだが。

「とりあえず、ボス倒そっか？ プライとなら二人でも倒せるよね？」

ボスといってもピンキリだが、ここのダンジョンはそれなりに危険なボスが控えている。普通であれば綿密な準備と数を揃えて、対処する相手だ。とはいえ、魔人ほどの相手が出てこなければ、俺とエストでなんとかなるだろう。



「油断は禁物だぞ」

「りょーかい」

エストの気の抜けるような返事を合図に、俺達は扉の向こうへと足を踏み入れる。

「綺麗……」

エストが感嘆の声を漏らした。

扉の向こうに広がっていたのは、広大な地底湖であった。

「凄いな。洞窟の奥深くだつてのに、全然暗くない」

辺りに結晶化した魔力の粒子が漂っていた。淡い緑の光を放ちながら、まるで雪のように舞う魔力光が、暗い洞窟を隅々まで照らしているのだ。

「見て、ブライ。湖にも粒子が浮かんててすごく綺麗」

「ああ、そうだな。ダンジョンは色々と潜ってきたが、この景色は格別だ」

しかし、綺麗な景色にはかり見とれていゝわけにはいかない。

「エスト、上だ!!」

わずかに殺気のようなものを感じると、俺は勢い良く地面を蹴って、エストの前に飛び出した。同時に、雷を纏った剣を思い切り振り下ろす。

「グウオオオオオオ!!!」

振り下ろした斬撃が、急降下してきた魔獣を弾き飛ばした。タイミングはバツチリのようだ。

直後、俺はエストを抱えて後ろに下がり、魔獣と距離を取る。

「ここはボス部屋だからな、観光は後だ」

「あ、ありがとう……」

力強い羽音が部屋中に響く。先ほどの魔獣が、巨大な翼をはためかせながら宙を漂っていた。

びつしりと詰まった緑の鱗、長く伸びた漆黒の爪、そしてこちらを睨みつける鋭い眼光。

「ブ、ブライ、あれ古代竜だよ!」

エストの腰が引けている。彼女ほどの魔術の使い手でも、古代竜は恐ろしい相手なのだろうか。

「まさかあんなのが湧くほどのダンジョンだったとはな……」

ドラゴンの中でも古代竜は最上級存在だ。その鱗は並の攻撃を無効化し、生命力も無尽蔵だ。その爪や、口から吐くブレスは、優れた防具でも紙切れ同然に破壊してしまうほどの破壊力を秘めており、純粋な戦闘力では上級魔族どころか、魔人に匹敵するだろう。

「まあ幸い、子どもの古代竜みたいだが……」

目の前の個体は同種の中ではかなり控えめだ。体長は俺の二倍ほどしかないし、魔人ほ

どの強さではないだろう。

「そ、そうなの？ それなら楽勝？」

「楽勝とまではいかない。とりあえず俺が攻撃を引き付けるから、エストは援護を頼む」俺は小手調べに剣に纏った雷撃を古代竜に放った。

しかし、竜はその場で急旋回すると雷撃をあつさりと振り払ってしまう。そして、その勢いのままこちらへ飛翔すると、鋭い爪を振り下ろした。

「……………」

俺は剣を振るい、爪の一撃を真つ向から受け止める。

「なんて重い一撃なんだ……………」

蒼銀の剣でなければあつさりと折られていたかもしれない。実際、こうして受け止めているだけでも凄まじい重圧を感じる。

「ブライ、援護するよ」

エストの掛け声と共に冷気が竜を包むと、氷柱が次々とその身体に射出された。

「グルウウウ……………」

一瞬、古代竜が怯んだ。俺は爪を弾くと、その隙を見逃さずに胴に一撃を見舞った。

「ガアアアアアアアアア！！！！」

鱗に阻まれて致命傷は与えられなかったが、わずかに傷付けることに成功する。まさ

か自分が傷を負わされるとは思わなかったのか、竜は反射的に距離を取った。

「ブライの攻撃、効いてるみたいだね。でも、魔術は効きが悪いかも……………」

「鱗が威力を軽減させてるんだろうな。様子見しないで、全力で倒しにかかった方が良さそうだ」

直後、竜が顎を天に向けた。

「まずい……………プレスが飛んでくるぞ」

古代竜の無尽蔵とも言える魔力から生成される強力な熱線だ。当然、防御など無意味で、確実に避けなければ致命傷になりかねない。

「グオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！」

やがて、咆哮と共に火炎を纏った吐息が吹き出された。俺は咄嗟にエストを抱えて全身に雷を纏うと、稲妻の如き速さで吐息を回避する。

直後、俺達の立っていた場所が、まるで火にあぶられたバターのようにどろりと溶けてしまった。

「う、うわあ……………まともに食らってたら、私達どろどろに溶けてたよ……………ありがとうブライ」

跡形もなく溶け去った地面を見て、エストが冷や汗を浮かべる。

「回避なら俺に任せてくれ。それと、どうにかしてあいつに近づく方法を考えないと」

先ほど傷を付けられたことで警戒しているのか、竜は近付いてくる気配を見せない。
直後、竜の周りにいくつもの魔法陣が浮かび上がった。それらはゆっくりと回転しながら発光すると、こちらに光弾を放ってくる。

「つ……数が多いな……」

無数の光弾を剣で捌きながらはやく。プレスほど致命的な一撃ではないが、数だけは大したものだ。

「ブライ、あのチュドーンってやってババァってやるやつで倒せない?」

「チュドーンババァってなんだ……?」

「あれだよ、あれ。魔人を倒した時のチュドバァってやつ」

「チュドバァって……一応《雷霆剣》っていう技名があるんだが……」

どうやら、雷を剣に蓄えて相手にぶつける剣技のことのようにだが、エストの語彙力
よ……

「そうそう。そのなんとか剣だ。それは使えないの?」

「……ここは地下だから難しいな」

自然の力を借りることで己の魔力以上の力を引き出せるのがあの技の利点だが、それだけ縛りも多い。《雷霆剣》は、その特性上、開けた空間でしか使えないのだ。

「うーん、魔術だと効きが鈍いし……あつ、そうだ。いいこと思いついたかも」

「いいこと?」

エストはそつと俺の耳に手を当てると、こしょこしょとある提案をする。

別に誰にも聞かれてないんだし、そんなことしなくても……と思うが。

「という感じで行こうと思うんだけど、どう?」

「そうだな。悪くはないと思う。あの鱗さえなければ、魔術も通るだろうしな」

エストの提案を受けて、俺は地面を駆け抜ける。

「それじゃ、足場を作るよー」

同時に、エストは地底湖の水から足場を生成した。それは竜の方へと続いており、俺はその上を渡って一気に距離を詰めていく。

竜は再び光弾で迎撃しようとするが、その前に俺はエストの用意した別の足場に跳び乗り、かわしていく。そして、鱗の薄い腹部目がけて跳び掛かると、思い切り剣を突き刺した。

「グオオオオオオ!!」

苦しそうな雄叫びをあげながら、竜は身をよじって俺を振り払う。そして、宙に投げ出された俺にプレスを吐きかけようと顎を天に向けた。無防備な空中では回避も難しい。

だが、ここまでは読み通りだ。

「ブライ、これ使って!!」

「ナイスタイミングだ」

プレスが直撃する寸前、俺はエストの生成した足場を踏んで跳躍し、難なくそれをかわすのであった。

「よし、傷は付けた。エスト、あとは頼んだ」

「うん、任せて!!」

エスト渾身の冷気が俺に向かって解き放たれた。もちろん、誤射ではない。

俺は雷の代わりにエストの冷気を剣に纏うと、先ほど付けた傷口に斬撃を叩き込む。

「ギャァァァァァァァァァァ!!!!!!」

傷口から直接、冷気を注がれては、さすがに耐えられないようだ。竜は断末魔の叫びを上げると、全身を凍結させて湖面へと落下し、砕け散った。

「ふう……」

俺は氷の足場に着地すると、ひと息ついた。

「エスト、いい援護だったぞ」

「へへ、でしょ」

援護のタイミングは完璧だった。俺が欲しいと思った時には、次の足場が足下に展開され、かなり息の合った連携が出来た。

「それじゃ採集といくか」

俺はエストを伴ってドラゴンの死体へと近付いていく。

「さて、戦利品はこんなもんか」

《竜の鱗》《竜の爪》《竜の翼》《竜眼》《竜の心臓》《極上の竜の肉》etc..

鱗は防具、爪は武器、肉は食用と、竜には様々な使い道がある。

売却すればかなりの値段になるだろうし、村で加工してもいいだろう。

「ねえねえ、ブライ。この宝石みたいなのは?」

エストが地面に転がった、紅く輝く石を指差した。

「……これはラッキーだな。多分、竜石だ」

「竜石?」

俺は竜石について、エストに一通り説明することにする。

ドラゴンには貴石を腹に蓄え、消化の補助とする習性がある。呑み込まれた貴石は竜の魔力を浴びて、色の深みが増し、極めて希少で高価な宝石となるのだ。

色ツヤを見るに、このドラゴンが呑み込んだのは紅玉の原石なのだろう。

「しかし、よく見付けたな。サイズは決して大きくはないが、これだけでもかなりの高値が付くはずだぞ。いい拾いものをしたな」

「へへ、目には自信があるからね」

さて、戦利品の確認はこんなものだろう。あとは、ドラゴンからルーンを抽出するだけだ。

「エスト、抽出を頼む」

「うん、任せて。マジカコード《ルーン・エクストラクト》・承認」

エストが呪文を唱えたと、ドラゴンの死体の一部から、淡い緑の光が浮かび上がった。

「うー……………」

唸るような声を発すると、エストは極めて真剣な表情で淡い光を見つめる。やがて光は球体の形にまとまり、エストが取り出した結晶の方へとゆらゆら漂っていく。

ルーンは大気に触れると容易に霧散してしまう。今エストがやっているのは、ルーンを抽出して、それを霧散させることなく移動させる魔術だ。かなり繊細な魔力操作が必要とされるため、見ている以上に集中力の要る作業だ。

「……………で、出来た」

ルーンの光が結晶の中に吸い込まれ、エストは額の汗を袖で拭った。この結晶は《ルーンクリスタル》という、魔物の体内のルーンを保管するためのアイテムだ。

エストはゆっくりと立ち上がると、手に持った結晶をこちらに見せてくる。

「なんとか、うまくいったよ。でもこれ、なんのルーンなんだろ」

《ルーンクリスタル》には、ルーン文字と呼ばれる独特な紋様が浮かび上がる。そのルー

ンが持つ効果を示したもので、この紋様を見分けることでルーンの効果を知ることが出来るのだ。

「ダメだな。俺の【鑑定眼】じゃ、ぐにやぐにやと揺れて、文字の形すら分からん」

「それってかなりレアなルーンってことだよな？」

今の俺の【鑑定眼】スキルはBランクにまで伸びている。それで見抜けないのであれば、Aランク以上の代物であることは間違いない。

「古代竜が持ってたものだ。当然、強力な効果に違いないだろうな」

「でもそれだと、野菜の種に付与するってのは難しそう。多分、ルーンの力に耐え切れなくて、種が自壊しちゃうんじゃない」

ルーンは不釣り合いな器に付与しても意味はない。Aランクほどのルーンであれば、それなりに上質な鉱石を加工した武器などでなければ、エストの言ったように器の方が耐えられるのだ。

今回は野菜の品種改良にルーンを使いたい。そうすると欲しいのは手頃なルーンだ。「ルーン探しはとりあえず不発か。まあ古代竜を仕留めたんだからリターンは大きかったけどな」

俺達は爪や鱗、心臓などの高価な部位と、肉を持てるだけ持っていくことにした。丸ごととは難しいが、ある程度の量なら、ダンジョンの入り口で待つ愛馬のロイが引き摺っていく

れるはずだ。

「戦果は上々だね」

「ああ。とりあえず一旦村に帰って、ダンジョンが再構築されるのを待つか」

そうして、俺達は洞窟を後にしようとする。すると……

——おめでとうございます。アルビオンダンジョンを解放しましたので、以下の機能をご利用いただけます。

【転移門の解放】

備考…各地のダンジョンと通じる転移門を、城に設置出来ます。

【マナゲートの敷設

備考…城の転移門と攻略済みのダンジョンを接続します。1つのダンジョンにつき10000マナを消費します。

「また、新しい機能が解放されたみたいだな」

前も魔族の討伐後に、新機能として城の地下に工房が解放された。「ログインボース」は、エイレーンの復興に連動して様々な機能が使えるようになる仕組みらしい。

「今回は転移門だって。なんだか便利そうだね」

「ああ。【転移】の魔法が使える人間なんてほとんどいないからな。それが利用出来るならこれほど便利なことはないな。早速——」

「今だ!! 取り囲め!!」

【ログインボース】を起動しようとした瞬間、数十人の冒険者達がぞろぞろとボス部屋になだれ込んできた。物々しい重装備に身を包んだ彼らは、統率の取れた動きで、あっという間に俺達を包囲する。

「二人組の魔族か。このボスはドラゴンだって聞いたが………つて、あれ?」

リーダーと思しき大男が、間の抜けた声を上げた。そして、兜を外すと、警戒を解いてこちらに近付いてくる。

「いやいや、誰かと思ったらブライとエストちゃんじゃねえか」

俺達を取り囲んだ一団のリーダーは、俺の古巣【月夜の猫】の戦士ガルシアであった。

*

「まさか、二人が先に入ってたとはなあ。どうりで魔獣がほとんどいなかったわけだ」
そう言ってガルシアが豪快に笑う。

「しかし、結構気合い入れて準備したんだが、空振りになっちゃったな」

そつとため息をつく、ガルシアは肩に乘せていた巨大な戦斧を地面に下ろした。
 「ドラゴンキラーの武器に耐火装備の鎧か？」

ガルシア達の持つ禍々しい赤色の武器は、竜殺しの特性を秘めたものだ。値は張るが、ドラゴンの硬い鱗を容易く剥がしてしまつたため、対竜戦闘でよく使われる。仮にも相手は魔人にも迫る戦闘力を持つ古代竜だ。ガルシアも十分すぎる対策を取つたのだろう。

「ああ、まあな。今回の依頼は竜の心臓だからな」

依頼品の中では最上級の品だ。どうやら、大口の依頼を請けたようだ。

前回の騒動で、結果的に、【月夜の猫】が請け負うはずだった国王の依頼を、横取りする形となつてしまつて気がかりであつたが、この様子ならそこまで経営には響いていなさそう。

「しかし、まさか二人で古代竜を倒しちゃうなんてな。こつちは三十人掛かりで準備したつてのに、随分と差を付けられたもんだ。なあ、ミレイ」

ガルシアが側にいた栗毛の少女に声を掛けた。

「そうですね!! さすがブライさんです。魔人を倒しただけあります!!」

栗毛の少女は、はつらつとした声を上げると、ずいっと俺の方へと迫ってきた。

「ガルシア、彼女は？」

ギルドメンバーの顔と名前は一通り覚えているが、少女の顔には見覚えがなかった。

いや……魔人と戦つた時にちらりと見かけたような気がする。新入りだろうか？

「ああ。こいつはミレイって言つてな。お前が抜けてから加入した新人だ」

「ミレイです。よろしくお願いします!!」

ミレイが勢い良く頭を下げる。見た目だけならお嬢様っぽい雰囲気だが、言動はなかなかエネルギッシュな人物だ。

しかし、そうか。エドと同じで、俺が抜けた後のメンバーだったか。

「本当は冒険者なんて危ないからやめて欲しかつただけだな」

側にいる眼鏡を掛けた青年が、ツンケンした様子で言つた。彼には見覚えがある。確か、俺が抜ける少し前に加入した、リックという青年だ。彼の言い方からすると、二人は以前からの知り合いのようだ。

「私だって、自分を守るぐらいの力が欲しかつたの!!」

「だからって、竜の討伐にまでついてくるなんて、無茶だ!! 自分の立場を考えてくれ」
 リックはただならぬ様子でミレイを咎める。どうやら、なにか事情がありそう。

「あの二人、なにか訳ありなのか？」

「ああ。この二人に関しては色々あってな。あまり詮索しないでくれや。おっと、そういうえばミレイはこいつになにか用があつたんじゃないか？」

「用？」

顔を合わせたことはないで、当然心当たりはないが……

「えっと……その、実はブライさんにずっと言いたいことがあって……」

さて、その新人のミレイなのだが、なにやらもじもじとした仕草を見せた。

「その……あの時は本当にありがとうございました！——」

すると、少女は大きな声を上げながら、深く深く頭を下げたのだ。

「あの時？」

魔人戦のことを言っているのだろうか？ しかし、これといって感謝されるようなことをした覚えはない。

「あのガルデウスという魔人の攻撃で先輩達がやられたとき、私、怖くて逃げ出したんです。けど、ブライさんはそんな相手にも臆せず戦って……とても、かつこよかったです!!」

「良かったな、ブライ。ミレイはあの時から、お前のファンになったんだとよ」

「ファ、ファン？ さすがに、恐れ多い」

さすがに持ち上げすぎだ。実際はかなり手こずって、ぼろぼろのぼろ雑巾になっていたので、そんな風に言われるのはかなり気後れする。

「へえ……ファンだって……」

困惑していると、エストがニヤけた表情を浮かべながら、意地の悪そうな視線を寄越してきた。

「なんだ、そのジトーつとした目は」

「いえいえ、別にー。ブライさん、モテモテですなーと思って。このこのー」

エストが肘をくいつくくいつとぶつけてくる。

くつ、こいつからかってやがる……そっちがその気ならこちらでも仕返しをしてやろう。

「まあ、そのなんだ……札ならここの、ここの!! エストにも言ってやってくれ。エストがいなかったら、俺の命もなかったからな」

そうして、俺はエストを前に突き出す。

「え、えっと……ブライさん？ 急にそんな、持ち上げてどうしたんです??」

突然のことに、エストが照れたような、困惑したような表情を見せる。

「あ、自分、見ました!! ブライさんが最後にあの魔人を貫く寸前、大空を覆わんばかりの冷気が魔人を包んだのを!!」

「そうだ。最後の一撃が届いたのも、ここのエスト先生が全力でサポートしてくれたからだ」

「い、いや、あれはレヴェナントさんとラピスも手伝ってくれ——」

「エストにはずっと世話になりっぱなしだ。俺が途方に暮れていた時も、魔族の襲撃に苦戦した時も、今の古代竜戦だってな。本当にエストと出会えて良かったよ」

「も、もう、やめてつて、恥ずかしいから……その、さっき、からかったのは謝るから!!」

エストが顔を真っ赤にさせながら、俺の腕を引っ張る。

「おうおう、仲のいいこって……おじさん、モテないからちよつと羨ましくなるぜ」
そんな俺達の様子を見て、ガルシアがため息をつく。

「ガルシア先輩、元氣出してください!! その面倒見のいい性格なら、いつか先輩がいつていう物好きな人に出会えますよ。めげずに頑張ってください!!」

「ミレイ、全然慰めになってないぜ……」

ガルシア、相変わらずモテないのか。

性格は悪くないが、この暑苦しい雰囲気はウケが悪いのだろう。そういえばたまに、ギルドの女性冒険者が噂しているのを耳にしたことがある。悪い噂だが……

「だが、まあ……俺が言うのもなんだが、ブライにいい仲間が出来て良かったと思うぜ。クビはさすがにやりすぎだと思ったからな」

「ガルシア……」

そういえば、ライトが俺の追放を決めた時、ガルシアは渋っている様子だったな。あまり物事を深く考えないように見えるが、こいつなりにあの時のことを気にしていたということか。

「今更、言っても仕方ないが……ブライ、あの時はライトを止められなくて、すまなかった!!」

ガルシアが深々と頭を下げる。

「頭を上げてくれ。別にお前が言い出したことじゃないだろう? それに……」

俺はちらりとエストの方を一瞥する。

「ん? どうしたの?」

エストが首をかしげる仕草を見せる。

「結果的に追い出されて良かったってことだ。エストにラピス、レオナ、セインさんに村のみんな。今の俺には心強い仲間がいるからな。だから、ライトに追い出されたことぐらい、なんてことない」

ギルドを追われた時は先行きも分からず、追い出したギルドへの怒りでいっぱいだった。きつと、あの時の俺だったら、ガルシアの言葉を受け入れられなかっただろう。だが、今の俺は怒るところか、日々が充実している。むしろ、追い出してくれたことに感謝しているくらいだ。

「ともかく、これでお前と俺との遺恨はなしということにしよう。第一、あれはギルド長やライト、セラが言い出したことだ。少なくともガルシアがこれ以上、思い悩む必要はない」

「ありがとうな……」

ガルシアがぼそりと呟いた。

立ち読みサンプル
はここまで

「しかし、ブライ。お前、本当に変わったな。前は、もう少しギラついてるといっか、なんだか取っつきにくい雰囲気だったが」

「そうか……？」

しかし、思い返してみればそうかもしれない。あの時の俺は、パーティから外され、焦^{あせ}っていた。いくら修業^{しゆぎよう}しても、ステータスが上がらないことに苛立^{いらだ}っていたのだろう。

「でも、今はいいよなあ。お嬢ちゃんみたいなかわいい子達と一緒に、いつの間にか魔人を倒せるほどに強くなってるしよ」

「か、かわいいつて……へへ、ブライ。ガルシアさん、いい人だね」

「なんだ？ 前は【月夜の猫】は嫌な人ばっかだとか言ってた気がするが」

「そ、それは、あの人達が許せなかっただけで、別にギルドの人全員がどうってわけじゃ……」

まあ、あの時のギルド長達の態度は、見ていて気持ちのいいものではなかった。エストがそう感じるのも、無理はないだろうが。

「魔人を倒した……ね。ガルシアさんは、まだそんな与太話^{よたばた}を信じているんですか」

不意に、リックが不機嫌^{ふきげん}そうな物言いではそりと呟^{つぶや}いた。

「おいおい、リック。お前、もしかしてまだ疑^{うたが}ってたのかよ」

「だって、そうでしょう？ 万年お荷物、経験値泥棒^{どろぼう}、真面目^{まじめ}だけが取り柄^{とらえ}の会計役。そ

んな男が、魔人を倒した？ 何かの間違いでしょう」

「ちょ、ちょっと、さすがに失礼じゃない？ メガネの人」

リックの言葉を聞いて、エストがずかずかと前に出た。

「メ、メガネ？ 僕にはリックという名前があります。失礼なのはそっちですよ、頭のゆるそうなお嬢さん」

「ゆ、ゆるそう!? なんてこと言うの!? ガルシアさんを見て、いい人もいるんだなって思ったのに」

珍しくエストが頭に血を上らせている。俺のために怒ってくれるのは嬉しいが、さすがにこんなところで揉めないで欲しい。

「ああ……その、エスト。とりあえず、落着こう」

「リックもだぜ。そんな風に挑発するなんてらしくないぜ」

俺とガルシアは一旦、二人をなだめる。

「すまん、ブライ。あの時、俺とこいつは気絶^{きぜつ}してたからな。お前が魔人を倒したってのも、エドから聞いただけなんだ。もちろん、俺は疑ってねえけど、リックみたいに信じてない奴もいるってわけだ。それに、こいつにも色々事情が……」

「ガルシアさん!! 余計なことをペラペラ話さないでください」

「お、おう、悪い悪い」